

# 情報技術の匠

PROFESSIONAL

第36回  
コンポーネント開発の匠

## 天文少年の夢

小さなころ、多くの男の子は「宇宙飛行士になりたい」という夢を持つ。二上少年も「スペースシャトルに乗ること」が夢だった。

やがて中学生にでもなれば、「将来の夢」も現実との折り合いを付けるようになるのだが、彼は違った。

天文部に入り、あこがれの天体望遠鏡を手に入れ、ますます宇宙へいざなわれていったのである。自分の望遠鏡のレンズがとらえた土星の輪はあまりにも美しく、今でも忘れられないという。

天体写真の撮影にも、中学 / 高校時代を通じて夢中になった。望遠鏡にカメラをセットし、星の日周運動（地球の自転により、星が地球の周

りを回るように見える運動）に合わせてカメラを動かしながら、シャッターを開けっ放しにする。うまく撮れた北アメリカ星雲やすばる（プレアデス星団）の写真は宝物であった。

大学受験が近づいても宇宙への思いはやみがたく、大学では理学部で素粒子物理を専攻することにした。

素粒子物理の分野では、カミオカンデによる素粒子の検出でノーベル物理学賞を受賞した東京大学名誉教授 小柴 昌俊氏のニュートリノの研究が有名であるが、太陽や超新星爆発で生成されるニュートリノと同様の研究に二上も取り組んだ。

「天文学というと、地学の延長のように思えるかもしれませんが、ほとんどが物理学になります。また、スペースシャトルの宇宙飛行士になるには、視力が良いことと理学博士号を取得することが条件になります。そのため、物理の理学博士号を取得する必要があったのですが、私は学部を卒業して日本アイ・ビー・エム株式会社（以下、日本IBM）に入社しましたから、その時点でスペースシャトルに乗るとい夢はあきらめたことになります（笑）。まあ、スペースシャトルそのものに興味があったのではなく、地球上から見える星は大気の状態や明るさの加減で限界がありますから、宇宙に出て星を眺めてみたいというのが夢だったのですが...」



二上 哲也（にかみ てつや）

日本アイ・ビー・エム株式会社  
サービスストラテジー  
テクニカルストラテジー&コンピテンシー  
SOAコンピテンシー 部長 兼  
ICPエグゼクティブITアーキテクト

【プロフィール】

1990年、日本IBM入社。APTOにてメインフレームのシステム評価を担当。1995年、幕張のシステム研究所に異動し、エージェント、CORBA、WebSphere®、EJB、Webサービスといった先進技術をサポート。2004年から箱崎事業所に異動し、現在はSOAコンピテンシーにおいてSOA CATと呼ばれる技術サポートとスキル育成チームのリーダーとして活動している。

現在、二上は、SOA（Service Oriented Architecture：サービス指向アーキテクチャー）普及のためのデリバリー強化（ガイド作成や研修実施）や、アセット構築（基盤と業務）の推進チームをマネジメントする一方で、IT（情報技術）アーキテクトとして、SOAによる実際のお客様のシステム構築を実践している。日本IBMにおけるSOAの第一人者の一人として、いわば大車輪の活躍をしているのである。

そんな二上も、入社時にはコンピューターに関する知識はほとんどゼロであった。大学時代は、素粒子物理の研究ではもっぱら実験を担当していたため、コンピューターを使う機会はほとんどなかったのである。

にもかかわらず就職先に日本IBMを選んだのは、ものづくりがしたいという思いが強かったし、コンピューターの勉強をするのもいいかもしれないと考えたからだ。

「ものづくりがしたいという願いがかなない、入社後はAPTQ (Asia Pacific Technical Operations: 開発製造部門)に配属されました。ただ、メインフレームのシステム評価のような仕事だったので、ものづくりにさらに近い仕事ができるように、独学でオブジェクト指向の勉強を始めました。これがわたしのキャリア形成の分岐点となりました。当時のシステム研究所への異動後になりますが、米国でCORBA (Common Object Request Broker Architecture) というオブジェクト指向技術が話題になっているということで2週間にわたり米国に派遣され、帰国後はCORBAの第一人者と見なされるようになりました。」

その結果、CORBAに興味をお持ちの多くのお客様に技術的な説明をさせていただく機会を得て、お客様のシステムを今後どうしていくかを検討させていただいたり、実際にコンポーネント化を実践することが可能になったのです。」

二上は、Java™をはじめ、オブジェクト指向言語そのものは以前から使われてはいるが、実は 世の中で

思われているほど、きちんとしたコンポーネント化は進んでいないと指摘する。

「もちろん部品にはなっているので、例えば顧客部品や口座部品といったコンポーネントをしっかりとモデリングしてアプリケーションが作られているケースはあまりありません。なぜなら部品化の設計に時間がかかってしまうため、時間的に制約の多いプロジェクトではゆっくりモデリングをしている時間が取れません。そのため本当の意味でコンポーネント化されているシステムはかなり少ないのです。」

この問題を解決するアプローチ方法の一つがSOAです。SOAで定義されたサービスは、幾つかをまとめて粒度の大きなサービスコンポーネントとして扱います。その中を粒度の小さなコンポーネントで構成することで自然なコンポーネント化の流れが可能になります。

実は、わたしの次の目標は、コンポーネントを日本IBMの中で横展開していくことです。社内の多くのエンジニアが、たぶん同じようなものをたくさんつくっているはずなので、それを横展開しない手はありません。そんなふうにはSOAベースのサービスの再利用に取り組んでいきたいと思っています。」

二上は、長年にわたってコンポーネント化にこだわり続けた理由を「物事を、より自然なものに近づけたいという思いがあるからかもしれません。」と自ら分析する。

「星を見るのが好きになると『惑星が恒星の周りを回っているのはなぜ

だろう』とか『宇宙は広がった後に一体どうなるんだろう』という疑問を持つようになります。この疑問の解決は『自然の摂理』すなわち『宇宙の法則』という解に行き着くと思うのですが、コンポーネント化も『プログラムをどのように作るのが一番自然なんだろう』ということを追求めた結果のように感じます。

CORBAに取り組んでいた当時、お客様からシステム構築のご相談を受けて感じたのは、プログラムをもっときれいに整理して、保守のしやすい構造にやり直したいというお客様が意外と多いということでした。自然に近い形でコンポーネント化しておけば、開発しやすいし、設計も分かりやすいし、メンテナンスもしやすいはず。つまり、コンポーネント化が、自然な形でシステムをつくる近道だということ。」

毎年恒例の家族旅行は、10歳になる長男のサッカーの応援とともに、二上にとっては貴重な息抜きのひとつだ。そして長男が12歳になったら、もう一度ハワイに行きたいと考えている。

「去年の家族旅行でハワイに行ったのですが、天文学の聖地であるマウナケア火山の国立天文台ハワイ観測所は12歳以上にならないと見学できないのです。ぜひ山頂で満天の星をながめたいと思っています。」

ハワイで家族と一緒に見る星は、きっと、中学生のころ自分の望遠鏡で初めて見た土星の輪のように美しく輝いているに違いない。